日本保育学会公式シンボルマーク

日本保育学会会報

2010年1月5日　発行
編集・発行　日本保育学会
編集責任者　戸田雅美

JAPAN SOCIETY of RESEARCH on EARLY CHILDHOOD CARE and EDUCATION

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B,Rロジェ T-1
Tel 03-3234-1410 Fax 03-3234-1414
http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsrec/index.html

●第146号●

●特集● どの子にもうれしい保育を考える

第62回大会では、シンポジウム「障害のある子どもへの今後の統合保育、特別支援保育を問う！」が行われた。今回、この議論を広げる形で特集のテーマとした。どの子にもうれしい保育を会員とともに探究する一歩としたい。

どの子にもうれしい保育を考える

野本　茂夫

障がいのある子どものいる保育では、地域の他職種の専門家との協働が必要です。しかし、保育の現場では、その在り方について悩んでいる場合があります。それは、保育現場に他の専門家の理論や手法が単純に導入され、保育の一部がそのやり方に取って代わられている場合などに起こります。

時には、その在り方が障がいのある子どもに一人の保育者が付き、その場だけ異質の保育（活動）になったり、円滑な集団活動を維持するために付き添う監視役のようになったりしていることがあります。そこでは、主体的に生きている子どもの「今」が見当たりません。子どもの「今」がなければ、その子どもにふさわしい経験の内容が生まれてきません。仲間とのかかわりが実質的に閉ざされている保育環境では、他者との関係性の中で新しく育つ自分の心が働き出しません。

なぜこんなことが起こるのでしょうか。それは、同じ保育の場でありながら異質な理論や方法が生々しく同居しているからです。もちろん、そうしたことが必要な時もありますが、むしろ特別な場合です。本来、統合された保育であれば、同じ原理で営まれ取り扱われるべきです。

障がいのある子どもやかかわりの難しい子どもの保育を探求していくと、その子どものことだけでなく一緒に暮らす周りの子どもたちとの関係が切り離せません。それは、保護者についても同様です。そして、保育者自身のかかわり方や保育の見方・考え方が深く関わっています。障がいのある子どもやかかわりの難しい子どものいる保育を考えるということは、普段の保育そのものを考えることと基本的に同じことです。

そこに違いがあったとすれば、より丁寧に一人ひとりの子どものことや保護者のことを配慮し、今まで気づけなかった子どもや保護者の姿までも注意深く見つめ直し、保育を振り返り考察し、保育の改善を怠らず続けていくことの大切さがより鮮明に自覚されたことです。他職種の理論や手法に学ぶことは多々あります。しかし、その場合は、その理論や手法を保育の視点で十分に読み解いて取り入れる力量が必要です。そのための研鑽が他職種の専門家と協働していく重要な条件です。

保育は誰のためにあるのでしょうか。最近の少子化対策や待機児問題を考えると、保護者のため、社会維持のためなのかと考えさせられます。それは保育が担っている大事な役割ではあります。しかし、誰のためかと問われれば、「子どものため」と胸を張って答えたい。では、何故、子どもは幼稚園や保育所に行くのかと問い直されれば、「それは、楽しいから、うれしいから」と明快に答えたい。幼稚園や保育所では楽しいことうれしいことばかりではないだろうと反論されれば、「子どもの園生活が主体的なものになっていれば、生活や遊びの中で出会う苦しさや辛さは、自分が育つ為に必要な経験であることを子どもは生まれながらに知っており、辛抱強くその課題に挑戦し、幼い知恵と勇気を振り絞って乗り越え、さらに大きく成長し得た喜びに子どもは満ち溢れているではないか」と問い返したい。

障がいのある子どもにもそうでない子どもにも保育は必要です。保育は、子どものために、大人が、社会が、責任を持って整え、用意しなければならない営みです。その保育がどの子にもうれしい保育になるとき、保護者にとっても、保育者にとってもうれしい保育になるはずです。障がいのある子どもの保育を探求することも、どの子にもうれしい保育を探求することも同じ原理で考え抜いていくことを根本に据えておく必要があります。

●*Profile*
野本　茂夫（のもと　しげお）
國學院大學幼児教育専門学校　主事
保育者と協働し障がいのある子どものいる保育を探究することから、保育実践における保育の見方、考え方の枠組みを問い直し、保育臨床相談を通したかかわりから保育がどの子にもうれしいものになるにはどうしたらよいのかを研究テーマに考えて取り組んでいます。

子どもと作る“一緒の保育”

加藤　和成

今年の“青空フェスティバル”（運動会）でも多くのことを考えさせられました。この運動会は、ラインを引いたり入退場門やテントの設置はなく、大きな青空とどこまでも続く緑しかない大きな公園の草原の真ん中で行われ、事前の保育で楽しんできたストーリーの場面を楽しむように進められます。

例えば今年は「ブレーメンの音楽隊」ということで絵本を楽しみ、登場人物であるさまざまな“動物”や“泥棒”になり、鬼ごっこや劇をして遊んだり、粘土や紙制作、絵の具などで表現することを繰り返し楽しみました。こんな毎日を繰り返し、本番では、お父さんたちの扮する“泥棒”から逃げるように走ったり、クラスごとに考え“泥棒”と“動物”のチームで綱引を競い合ったりしました。

こんな運動会を、20数年模索を繰り返しながら続けられてきたのですが、これらは競い合うだけではなく“みんなで楽しんで作る”という思いがあったから考えられてきたように思います。しかし、年長児だけは全員参加の“クラス対抗リレー”があり、思い切り競い合います。歩くことのできない子や、勝敗に関心のない子も一緒に参加し勝敗を競うということは、無理があり歪みが出てくるのは当然のことですが、今年も、必死になるこのリレーに向けた練習の過程において、改めて気づかされる出来事がありました。よく遊びかかわり合ってきたクラスであったように思っていた仲間の中から「～ちゃん、なんであんなに走るのが遅いの?」とか「僕が走ると負けるから走らない方がいいんだよ」などという声も聞こえてきたのです。悔しさのにじむ「あいつが遅いからだよ」と吐き捨てるような声とは別に、歩くことがやっとの友達の懸命な姿を目にして、その子が今ごろになり、みんなと違うその姿に真正面から向き合った声のように感じられました。仲間を作っていくための“その子らしさ”や“違い”に気づかせるような保育者の配慮や意識が足りなかったのか、2学期の運動会前になってこんな発言や思いが出てきたことは驚きでもありました。

このような保育を通して私たちは、今回の運動会に向けての活動は“勝ち負けを経験し仲間になってきた”などと満足するだけではなく、子どもによっては、クラスにいる友達の本来の姿に気付き、仲間となっていく一つのきっかけとなった活動であった、と感じたことを振り返りました。また、そんな子どもたちの気持ちの葛藤に対して保育者一人ひとりは、どんな思いを語ってきたのかという“生き方”を問われるような日々でもありました。

私たちはこんな特別な活動から学び、普段の何気ない保育のなかでこそ、子どもたちの思いや違いを感じて、そのことを子どもたちと、その子に近づいた活動を柔軟に考え作っていくことが“自分と違う他者を知り受け入れていく”ということに繋がっていくように思うのです。

●*Profile*
加藤　和成（かとう　かずなり）
学校法人希望学園　葛飾こどもの園幼稚園　園長
障がいのある子どもと"みんなと一緒の保育"とは何かを長年考え、インクルージョンを目指しています。その結果、子ども主体の子どもと共に作る保育を実践し、子どもたちと感じ合える生活を大切にしています。

一人ひとりのうれしい気持ちを大切に!

徳岡　久枝

私の勤めている愛育養護学校は特別支援学校の一つで幼稚部と小学部があります。子どもは学校に来ると自分のやりたい活動を思い思いに展開します。大人は子どもがそれぞれの活動を納得のいくかたちで実現できるよう支えたいと子どもに応えていきます。他の幼稚園や保育所に比べれば大人が多くいるので、子どもに丁寧に応えていけるはずです。でも、同時に何人かの子どもに気を配らなくてはならず、思うような保育ができないと感じるときもあります。どの子にもうれしい保育なんて…。

でも考えてみると、一人ひとりがうれしいと感じる保育が集まれば、どの子にもうれしい保育になるのかもしれません。昨年から私が担任している子どもとのやりとりを通して体験したことが浮かんできました。1年生のその子は絵本が大好きです。一日中でも絵本のコーナーで過ごすか絵本を持ち歩いて過ごします。たくさんの絵本を次々と取り出し、大人に差し出し、支えてもらいながら、自分でページをめくります。言葉を発しないその子がどうしたいのか、何を大人にして欲しいのか、まずは示されたページを読んでいきました。時によりページのめくりかたが異なるので、覚えてしまった所だからと、うわの空で応えてしまうと本を掌で叩いて「ちがうでしょ」とばかりに大人の顔を覗き込みます。言葉は発しませんが表情は真剣です。次第に本を通してその子がいろいろなメッセージを伝えてくれるようになりました。登校してすぐに「おはよう」という本を持ってきたり、買い物に行こうかと大人が話していたら「お出かけ」の本を持ってきたりします。また、食事の途中で席を立ったかと思うと「おなかいっぱい」というページをめくったり、お腹の調子が悪いとき「たいへん」という言葉を何度も読ませていたのに調子がよくなるとそのページの前でぴたっとめくるのをやめたりしたこともありました。

そんな子どもとのやりとりに他の子どもがいろいろな形で関心を示しました。同じページを繰り返し読んでい

たとき、近くで絵を描いていた子が私の読んだ言葉を繰り返し楽しそうな口調で言ってくれました。その瞬間、部屋の空気が変わったように思えました。別々のことをやっているように見えた二人が実は同じ空間を共有し、同じ保育の場を作っていたことを改めて感じさせられた瞬間でした。また別の子はたくさん本があるにもかかわらずわざわざその子が気に入ってみている本を一緒に覗き込んできます。また、あえてその子の読んでいる本を持っていってしまうなど、さまざまなかたちで子どもたちが関わってきてくれました。その子と大人とのやりとりに興味があったり、楽しそうに見えたりきっかけはいろいろでしょう。でも、どの子も自分が大人から大切にされ、真剣に関わってもらった体験があることで、友達が大人と真剣に関わる場の中にいて、自分も同じようにその場でうれしい気持ちになれるのかもしれません。

一人ひとりに真剣に関わることの積み重ねが、どの子にもうれしい保育につがることを感じています。

●*Profile*
徳岡　久枝（とくおか　ひさえ）
愛育養護学校で発達がゆっくりだったり、小さい集団なら自分らしい活動が展開できたりする子どもたちとの毎日も30年になります。小さい学校なのですべての仕事を職員みんなで行うため、あっという間に時が過ぎていきます。でも子どもと過ごす日の朝は、常に新しい自分でいたいと考えています。

支援者や保育者が気になる子どもとのかかわり
－居場所作りと子どもの成長－

藤井　和枝

私は、ある「子育てひろば」で育児相談にかかわっています。そこでは、半年以上の準備期間を経て、1年ほど前から、ひろばが閉館の日に普段のひろば利用が容易でない子どもたちと保護者に「特設のひろば」を用意して遊びに来てもらっています。月に1回の事業ですが、回を重ねるごとに成長していく子どもたちの姿に関係者一同大変感動しています。

ひろばのスタッフが、特設のひろばに「遊びに来ませんか」と個別に声をかけて誘っているのは、いわゆる気になる子どもたちです。沢山の親子で賑わうひろばには心も体も硬くなって入れない子、大きな声やかん高い声に不安や恐怖を感じて不機嫌になり泣きだす子、かろうじてひろばに入ってくるけれど隅っこの決まった場所で親子で過ごす子、自分のしたい遊びにこだわったり使いたい玩具を独占して他児に譲るのが難しい子、あちこち動き回るため始終母親に後を追われ行動を規制されている子、発達の遅れや運動機能に障がいがある子などです。

特設のひろばでは親子の人数が少ないため、落ち着いた雰囲気の中で子どもたちは自分の遊びたい玩具で妨げられることなく遊び、走り回ることもできます。また、子どもの数に対してスタッフの数が多いため、スタッフが子どもから遊びを引き出し、子どものペースで遊ぶことができます。ですから、母親達も他児とトラブルが起きないようわが子の後を追いかけたり、必要以上に周りに気を遣わなくてもすみ、ゆったりとくつろいで過ごせています。親同士で話をしたり、スタッフと話をしたり、子どもを気にせずにコーヒーを飲んだり（前からしてみたかったと話してくれる母親もいます）しています。

1回ずつは短い時間ですが、このような体験の積み重ねで子どもたちと保護者が徐々に変化してきています。たとえば、6回、7回と利用回数が増えるにしたがって、隅っこで親子で過ごしていた子どもが、他のスペースでも遊べるようになり、徐々にひろばのどこにでも行けるようになりました。さらに、他児が傍に来てもにこやかに過ごせるようになり、特定のスタッフでなくても応答してくれるようになりました。また、玩具を独占していた子どもが他児に玩具を触られても大声を出したり手を出したりしない時もみられるようになりました。このような子どもの変化は、同時に保護者の変化に繋がり、保護者の気持ちを少し楽にしてくれているように感じます。

保育所や幼稚園などの保育の場でも、気になる子どもが増えていますが、園の受け入れと資質の高い保育者の温かく適切なかかわりで、子どもたちに居場所ができ、成長しているのを見聞きするのは大変嬉しいことです。

保育者がそれぞれの子どもの発達段階と特性をよく知り、子どもを理解して好みに合った玩具や教材など環境を準備し、子どもの気持ちを尊重して、気持ちに余裕をもって気長にかかわる時、子どもは徐々に成長していきます。そのためには、保育者同士の連携と温かい支え合いが不可欠ですし、そういう雰囲気を生み出し保つのは、園長や主任の人柄と保育観だと感じています。

●*Profile*
藤井　和枝（ふじい　かずえ）
浦和大学こども学部　教授
子育てひろばでの育児相談、埼玉県特別支援教育巡回支援員として県内の幼稚園・小中学校の通常学級に在籍する気になる子どもの支援、某市保育巡回相談員として気になる幼児の支援に携わっています。障がい児者のきょうだい支援に関心を持ち、ダウン症児のきょうだいの支援を行っています。

保育者も葛藤する
－障がいのある子と共に、わらべうた遊びの実践から－

和田　幸子

「どの子にもうれしい保育」、このテーマは一保育実践者にとって目指すべき方向に向けての励ましになります。

私は知的障害のある幼児のための通園施設で音楽遊び

を、特に近年はわらべうたを用いて保育実践を行ってきました。共に育ちあいたいという思いで、近隣の健常児も受け入れ、障がいのある子とない子が混ざり合う子ども集団です。色々な子どもがそれぞれの表現をするので、保育者としてはそれらに応えようとしながら、まさに模索が続く実践です。障がいのない子は手がかからないというわけではありません。障がいのある子には配慮は必要です。それぞれ子どもたちは幼いながらも精一杯に生き、感じ考えている存在であることを私たちに示してくれます。

設定した音楽遊びでわらべうた遊びをしていたときのことです。3才の男児Dはミニカーを手にして、皆の回りをぐるりと走っていました。これはDの機嫌のいい時の動きなのです。しかし私たちは、ミニカーを手に握っている間はDは他者と関わりがないことに気づいていました。そこで、保育士がDに「(ミニカーを) 置いとく?」と声をかけ、さらに看護師も「置いておこうか？」と声をかけました。Dは大声で「いやー！いー！」と言って一旦は拒みましたが、自らミニカーを看護師に差し出して渡しました。しかしその後Dは泣き喚いて混乱に陥りその場から出て行ってしまいました。保育士はゆっくりDを追っていきました。

Dの激しい泣き声が壁を越えて聞こえてきます。この場の雰囲気が固まってしまいそうな泣き声です。そんな泣き方のきっかけをつくってしまったという気持ちと、それでもDに戻ってきてほしいという願いとの間で私も混乱しそうになります。私はわらべうたを歌い子どもたちとの遊びを続けましたが、心の揺れは続きます。すると、Dはベソをかきながら戻ってきました。ミニカーをずっと持っていたいと思っていたDですが、皆の遊びに参加してほしいという保育者の願いと、そのためにミニカーを少しの間手放してほしいという保育者の思いとを受け入れようとしたのです。Dは保育者の思いを受け入れようとしたものの、自分のその時の思いをどうしたらいいのかわからなくなり混乱したのではないかと察せられました。

その後Dは保育士の助けを受けながらわらべうた遊びの場に参加しました。手をつないでもらって『らかんさん』にあわせてリズムを打ってもらいます。そして輪になった皆と一緒に「よいやさっ」と右回りに回ります。繰り返し、リズムを打ってもらい、回ります。Dも「よいやさっ」とかけ声をかけていました。わらべうたのリズムを感じることと、ぐるりとめぐること、この交互の繰り返しを重ねるうちに、Dは笑顔になりました。ミニカーを手放した不安と混乱から回復するプロセスでした。歌声とリズムを感じながらこの場をぐるりとめぐることに身をゆだねることを選んだDが、新しい自分を見出していったのです。それは、皆と一緒にすることの楽しさをDが経験していくプロセスでもあったのではないでしょうか。

この間わらべうた遊びをリードしていた私は、Dに対して直接的な関わりを何もしていません。わらべうたを歌い続けることは、私自身も葛藤しながらも懸命にDの変容と育ちを願い望んで行った保育行為でした。そうしてこの場は、混乱していたDが再び帰ってくるところとなったのです。

このわらべうた遊びの場がDにとってもうれしい保育の場になっていたならいいなとこのエピソードを思い返しています。

●*Profile*
和田　幸子（わだ　ゆきこ）
生野みんなの家児童デイサービスこどもの家で保育・音楽遊びを担当しています。わらべうたを用いた保育実践では貴重な体験エピソードが多々あります。それらは私の体験にすぎないのですが、この中に保育の真実が秘められているのではとも感じます。拙いながら文章化して省察していきたいと思っています。